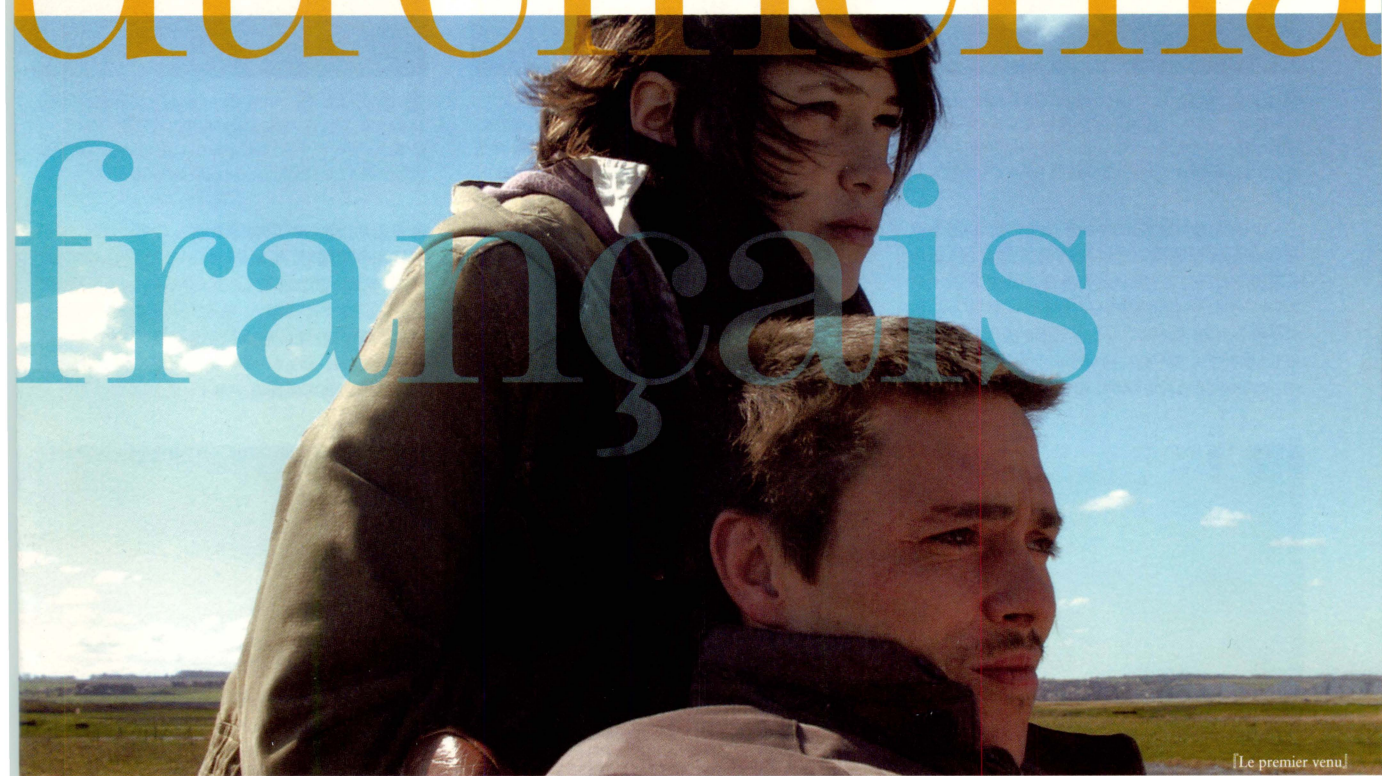


Trésors cachés du cinéma français

Trésors cachés du cinéma français

フランス映画の秘宝

《シネマテーク・フランセーズのコレクションを中心に》



[Le premier venu]

2008年9月5日(金)ー7日(日)、12日(金)ー15日(月・祝) 有楽町朝日ホール 東京都千代田区有楽町2-5-1 マリオン11階

主催：朝日新聞社、シネマテーク・フランセーズ

後援：フランス外務省、フランス大使館／協賛：株式会社シネフィル

協力：クラブツーリズム株式会社、エールフランス航空、アニエスベー、

コミュニティシネマ支援センター、東京日仏学院

運営協力：ぴあ株式会社／宣伝協力：パンドラ／字幕協力：アテネ・フランセ文化センター

お問い合わせ：03-3265-1434(事務局：8月4日～9月4日、9月8日～11日、平日のみ10:00～18:00)、

03-3218-0531(会場、会期中のみ) <http://www.asahi.com/event/fr>

とても見逃すわけにはゆくまい

蓮實重彦(映画評論家／元東京大学総長)

何かのはずみで公開されそびれたり、目に触れる機会のごく稀だった映画が、この秋、いきなり日本に登場する。大半の作品はシネマテーク・フランセーズの提供による。それを知らずにフランス映画を語ることなど許されるはずもない貴重な13本である。

できれば15本はほしいところだが、この際、贅沢はいわずにおこう。何しろ、フランス国籍を取得したばかりのユダヤ系でドイツ生まれのマックス・オフェルスによる味わい深い『マイエルリンクからサラエヴォへ』をはじめ、「呪われた作家」ジャン・グレミヨンのとりわけ美しい『曳き船』、病気を装ってドイツ軍の捕虜収容所から脱走したのだというジャック・ベッケルが撮りあげた爽快な無国籍活劇『最後の切り札』、ジャン・ジロドーの台詞を女優たちが朗唱してみせるロベール・ブレッソンの処女長編『罪の天使たち』、円熟期にさし

かかった異才サッシャ・ギトリのメロドラマ『あなたの目になりたい』までがスクリーンで見られるのである。

そればかりではない。「ヌーヴェル・ヴァーグ」の遙かな起源と見なされるロジェ・レーナルトの『最後の休暇』、ジャン＝ピエール・メルヴィルの『海の沈黙』のみならず、「ヌーヴェル・ヴァーグ」によって否定されたと思われるクロード・オータン＝ララの充実した『バリ横断』までが上映されるのだ。それに、クロード・シャブローの『肉屋』、ジャン＝クロード・ブリソーの『野蛮な遊戯』、モーリス・ピアラの『刑事物語』、エリック・ロメールの『三重スパイ』と個性豊かな犯罪映画が続き、ジャック・ドワイヨンの新作『誰でもかまわない』が全編をしめくくる。ゴダールの不在を不在とは思わせないこの例外的なプログラム、とても見逃すわけにはゆくまい。

Trésors cachés du cinéma français

入場料

※前売券・当日券全席指定

	前売1回券(日時指定)	当日1回券(日時指定)
一般	1,500円	1,800円
学生・60歳以上	1,400円	1,700円

前売券をお買い求めの方へ

- 発売日：8月9日(土)10:00から
(コンビニエンスストアは発売初日のみ11:00から)
- 購入方法：
 - ①お近くのチケットぴあ窓口で直接購入
 - ②電話予約後、店頭で受け取り
チケットぴあ／音声認識予約：0570(02)9999(10:00から23:30)
 - ③ファミリーマート、サークルK、サンクスで直接購入
- Pコード：1回券=554-363

「プレリザープ」(インターネット先行抽選販売)について

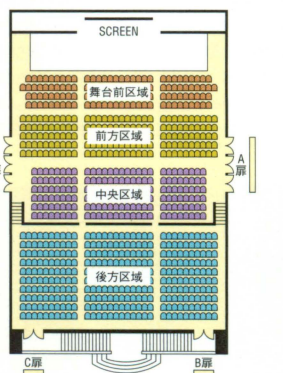
各回の1回券はプレリザープのお申し込みができます。受付開始は8月2日(土)11:00、受付終了は8月7日(木)11:00、抽選は8月8日(金)昼過ぎ。詳細は、@電子チケットぴあホームページ(t.pia.jp/cinema/cinema.html)をご参照ください。

指定席について

全席指定です。

4区域「舞台前」「前方」「中央」「後方」のいずれかを選んでご購入いただけます。なお、「舞台前」の席は可動席です。上映開始後は場内が暗いため、お手持ちのチケットの指定席にご案内できない場合がございます。上映開始時刻に遅れないようご来場ください。

■舞台前区域 ■前方区域
■中央区域 ■後方区域



注意事項

前売券の電話予約は各上映の5日前までです。直接購入は各上映の2日前までとなります。

前売券の払い戻し、交換、再発券はいたしません。

当日券はその日の上映分を9:30(初日は11:00)から売り出します。

高・専・大生、60才以上の方は、チケット購入時及びご来場時に必ず身分の証明となるものをお持ちください。

pia.jp/t
電子チケット
ぴあ
0570-02-9999

関連企画

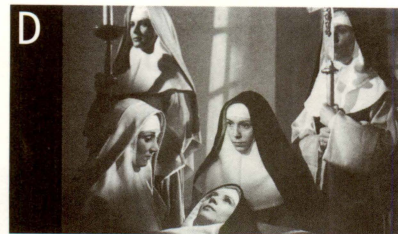
「フランス映画特集(仮)」2008年9月以降、仙台、神戸、広島、高知、山口、川崎、福岡、東京巡回予定
問い合わせ：コミュニティシネマ支援センター(03-5562-9574、<http://www.jc3.jp/>)

日仏交流
150周年記念

「ジャック・ドワイヨン特集」2008年9月3日(水)～25日(木)、東京日仏学院(03-5206-2500、<http://www.institut.jp/>)

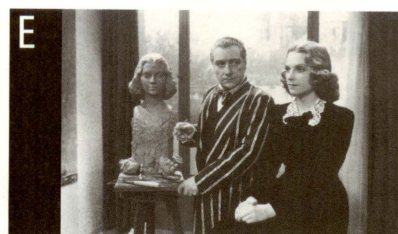
1930年代から 21世紀の最新作まで、 珠玉のフランス映画 13本を一挙上映!

日仏交流150周年を記念して、映画祭「フランス映画の秘宝」を開催します。上映されるのは、日本未公開作を中心とした日本ではほとんど見る機会がなかった貴重な作品ばかりで、フランス映画の新たな一面が浮かび上がってくるでしょう。セルジュ・トゥビアナ氏(シネマテーク・フランセーズ館長)と蓮實重彦氏(映画評論家/元東京大学総長)の二人が、監督・作品の選定をしました。上映作品のプリントは、この映画祭のためだけにフランスから借用します。是非この機会に、奥深いフランス映画の世界をスクリーンで堪能ください。



D 罪の天使たち Les anges du péché
(1943年/96分/35mm/白黒)
監督:ロベール・ブレッソン(Robert Bresson, 1907~99)
主な作品:『バルタザールどこへ行く』『ラルジャン』

ブルジョワの娘アンヌ=マリーは、自らドミニコ会の修道院に入り、修道女になる。その修道院は、刑務所で服役を終えた女性たちをも受け入れている。アンヌ=マリーは、刑務所で出会ったテレーズという反抗的な若い受刑者に関心を抱き、出所後は修道院に来るように誘う。罪と魂の救済というブレッソンならではの題材が扱われている長編第1作。



E あなたの目になりたい
Donne-moi tes yeux
(1943年/90分/35mm/白黒)
監督:サッシャ・ギトリ(Sacha Guitry, 1885~1957)
主な作品:『とらぶ譚』『ナポレオン』

彫刻家のフランソワは、美術展の会場で出会った若い女性カトリーヌにはれ込み、モデルを頼む。相思相愛になり、順調に見えた二人だったが、突然フランソワはカトリーヌに冷たい態度を取るようになる。理解できないカトリーヌだが、彼のそのような態度には理由があった。監督と当時の妻が、実際にカップルを演じたエレガントなメロドラマ。



F 最後の休暇 Les dernières vacances
(1947年/95分/35mm/白黒)
監督:ロジェ・レーナルト(Roger Leenhardt, 1903~85)
主な作品:『Le rendez-vous de minuit』

高校生のジャックは、南仏にある売却が決まった先祖代々の領地で、親族揃っての最後の休暇を過ごすことになる。彼は、いとこのジュリエットとともに売却を阻止しようとする一方で、彼女にひかれていく。思春期の少年が一夏に経験した出来事がみずみずしく描かれる。ヌーヴェル・ヴァーグの精神的な父と見られるレーナルトの長編デビュー作。



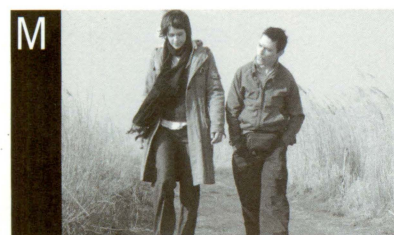
A マイエルリンクからサラエヴォへ
De Mayerling à Sarajevo
(1939年/95分/35mm/白黒)
監督:マックス・オフェルス(Max Ophüls, 1902~57)
主な作品:『歴史は女で作られる』『たそがれの女心』

フランツ・フェルディナン大公は、オーストリア=ハンガリー帝国の皇位継承者ではあったが、革新的な考えの持ち主だったため皇室から疎まれていた。チェコ人のゾフィー・ホテク伯爵令嬢と出会った大公は恋に落ちる。だが、身分が違う二人の前には困難が待ち受けていた。流麗なカメラワークを特徴とする巨匠オフェルスが、史実を基に作り上げた作品。



G 海の沈黙 La silence de la mer
(1947年/88分/35mm/白黒)
監督:ジャン=ピエール・メルヴィル
(Jean-Pierre Melville, 1917~73)
主な作品:『サムライ』『仁義』

ナチ占領下のフランスの田舎で、ドイツ軍に自宅を徴発された老人とその姪は、ドイツ軍将校と同居することになる。フランス文化を愛し、両国の融和を信じる将校は対話を試みるが、二人は沈黙で応対する。本作を見て、J・コクトーは自作『恐るべき子供たち』の映画化をメルヴィルに依頼したといわれる。レジスタンス文学の名作を原作とするメルヴィルの長編第一作。



M 誰でもかまわない Le premier venu
(2007年/123分/35mm/カラー)
監督:ジャック・ドワイヨン(Jacques Doillon, 1944~)
主な作品:『ボネット』『ラ・ビートル』

人生に物足りなさを感じるブルジョワの娘カミーユは、誰でもかまわないから、愛情をさげることにする。その相手は、周囲と折り合いが付けられなく、長らく妻と娘と会っていないコスタ。カミーユに関心を持つのは、コスタの幼なじみで刑事のシリル。三人の思いがはとばしり、交錯する。躍動感にあふれた演技を引き出す演出が冴え渡るドワイヨンの最新作。



B 曳き船 Remorques
(1941年/81分/35mm/白黒)
監督:ジャン・グレミヨン(Jean Grémillon, 1901~59)
主な作品:『愛慾』『この空は君のもの』

曳き船サイクロン号の船員たちは、仲間の結婚を祝っていた。その会場に、船が遭難しているという連絡が入るやいなや、船員たちは救助に向かう。妻がいるにもかかわらず船長のアンドレは、救助に成功した遭難船の船長の妻カトリーヌにひかれていく。若かりし頃のジャン・ギャバンとミシェル・モルガンというスターの共演が見物のリリズムに満ちたドラマ。



H パリ横断 La traversée de Paris
(1956年/82分/35mm/白黒)
監督:クロード・オートン=ララ
(Claude Autant-Lara, 1901~2000)
主な作品:『肉体の悪魔』『可愛い悪魔』

舞台は1943年、ドイツ軍占領下のパリ。失業中のタクシー運転手マルタン(プーヴリル)は、豚肉を運ぶ闇市の仕事を引き受ける。一人で運べる量ではないので、酒場で見知らぬ男グランジル(ジャン・ギャバン)を誘うが、グランジルはマルタンの手には負えないとんだ食わせ者だった。対照的な二人のコミカルな掛け合いが楽しいオートン=ララの隠れた名作。



C 最後の切り札 Dernier atout
(1942年/105分/35mm/白黒)
監督:ジャック・ベッケル(Jacques Becker, 1906~60)
主な作品:『肉体の冠』『穴』

南アメリカのある都市のホテルで、一人の男が撃ち殺される事件が起こる。捜査を担当するのは、警察学校の生徒で甲乙付けがたく優秀なクラランスとモンテスの二人。良き仲間でありライバルでもある二人は、先に事件を解決することでどちらが優秀か決めることにする。アメリカ映画の影響が見受けられる刑事もので、ベッケルの長編デビュー作。



I 肉屋 Le boucher
(1969年/93分/35mm/カラー)
監督:クロード・シャブロール(Claude Chabrol, 1930~)
主な作品:『いとこ同志』『石の微笑』

女教師エレヌと、戦争帰りで今は肉屋のポボールは、結婚式で知り合い仲の良い友達になる。その後、女性の連続殺人事件が起こり、エレヌはその現場に誕生日の記念にポボールに贈ったライターが落ちているのを見送るが…。スリラーの巨匠シャブロールを代表する作品の一つで、当時の妻ステファニス・オードランがエレヌを演じている。



J 野蛮な遊戯 Un jeu brutal
(1983年/90分/35mm/カラー)
監督:ジャン=クロード・ブリソー
(Jean-Claude Brisseau, 1944~)
主な作品:『ひめごと』『白い婚礼』

生物学者として輝かしい地位を築いたテシエは、突然全てを捨てて故郷に戻り、久方ぶりに下半身不随でわがままな娘イザベルと再会する。厳格な父に反発する娘だが、父との再会を契機に、次第に新しい世界が開けていく。その一方で、村では子供が犠牲となる連続殺人事件が起こっていた。高い評価を受け、一躍注目を集めた鬼オブリソーの長編デビュー作。



K 刑事物語 Police
(1984年/113分/35mm/カラー)
監督:モーリス・ピアラ(Maurice Pialat, 1925~2003)
主な作品:『悪魔の陽の下に』『愛の記念に』

刑事マンジャン(ジュラール・ドバルデュー)は、麻薬捜査で逮捕された若い女性ノリア(ソフィー・マルソー)を尋問する。釈放されたノリアは危険な金を盗み出し、裏社会から追われる羽目になり、彼女に愛情を持ち始めたマンジャンも巻き込まれていく。パリの嘘にまみれた裏社会と二人の危うい恋愛模様リアリに映し出されるピアラの大ヒット作。



L 三重スパイ Triple agent
(2003年/115分/35mm/カラー)
監督:エリック・ロメール(Eric Rohmer, 1920~)
主な作品:『緑の光線』『クレールの膝』

スペイン内戦が起こった1936年、ロシア帝政軍の将校が、ギリシャ人の妻と共にパリに亡命する。妻が隣人の共産党員と親交を深めている間、内密の任務を帯びた夫は頻繁に家を留守にする。夫はスパイであることは明かすが、誰のために働いているかは教えない。実話から創意を得たロメールのスパイ、裏切り、騙し、隠蔽に満ちあふれた痛快サスペンス劇。

上映プログラム

9月 5日(金)		13:00~H	15:30~F	18:15~M
6日(土)	10:30~G	13:10~J	15:40~C	18:30~I
7日(日)	10:30~E	13:10~L	15:30~座談会	18:00~D
12日(金)	11:15~B	13:45~K	16:35~A	19:10~G
13日(土)	10:30~D	13:10~M	16:10~H	18:30~K
14日(日)	10:30~F	13:20~B	15:45~L	18:40~C
15日(月・祝)	10:30~A	13:10~I	15:40~E	18:10~J

各回入れ替え制、定員750名、開場は上映30分前です。
座談会は入場無料で、セルジュ・トゥビアナ(シネマテーク・フランセーズ館長)、蓮實重彦(映画評論家/元東京大学総長)、ジャック・ドワイヨン(映画監督)、青山真治(映画監督)の各氏が出席する予定です。
9月5日(金)18:15~の上映前に開会式(約15分間)があります。

すべて日本語字幕付きの上映です。/作品A、C、D、E、F、J、K、Lは、シネマテーク・フランセーズ所蔵プリントで上映される予定です。/上映作品は外国から借用するプリントであるため、上映プログラムは変更の可能性あります。あらかじめご了承ください。/記載した上映分数は、当日のものと多少異なる場合があります。/上映作品は、不完全なプリントが含まれている場合があります。/上映作品は、英語字幕などが入っている可能性があります。